

世説新語

5
5699



門八〇
號 5699
卷

殘香集序

序類

晴侯氏曰

余嘗題字并荅翁肖像曰勤儉力耕儲
資滿贏富而能施澤及窮氓克家有子
其業益榮游優丰歲花月寄情辭雖拙
劣亦足以盡翁之平生也噫翁亡已四
丰矣今茲戊寅其子叟嗣為翁募諸名
人追悼之歌詞博搜及海外輯為一篇
名曰殘香集將以上梓來索余序其追

v 57231

遠之志可謂切矣翁名一貞號二國翁
又花翁下總香取郡嶼邨人家世治農
翁稼穡之餘暇常嗜所謂俳諧句者其
詠什爲世人所稱焉然未嘗廢家事家
道亦益隆云夫世之專務生產者往往
有身自滋殖而不恤他人之窮困者焉
又風流自喜人亦往往有蕩情於荃月
而不事其生產者焉二者皆失之矣翁

則不然既已勤儉力耕以富其家又以
其贏餘賑卹窮困則其於爲己爲人之
道得矣而後餘情及於荃月則可謂真
個風流也而今也諸名人之悼詞褒然
成帙則殆乎所謂其生也榮其死也哀
者矣余知翁之靈莞然含笑於地下宜
乎叟明之屑二焉有此舉也余深感叟
明追孝之志於其請序不復以拙劣辭

之也乃書以贈焉
明治十一年第八月

栗木並木正韶撰并書



無常

いふはぬをよ カキ 養

漸くは定ぬ

仍水乃く水

うすくも

その中

na⁺ A⁺ La⁺ La⁺
 kw ma kw wa
 ka⁺ a^ル ra^カ ru^ア
 wa^カ hi^エ ka^カ mo^ヒ
 dzu⁺ ya^カ na^ア no^ヤ
 | 10
 mo⁺ na^エ
 no^カ kw
 ru^ア te^ニ
 ta^ニ mi^カ
 yu^カ ra^ア
 ma^ル ru^ア
 dzu^ル ru^ア

英人ゼームス

宇井氏之年の忌

奈汁うも

竹窓

ふと

外國人の善い品を講す時その

妙ぬ法をいふ人よりゆひをめぐ

甚の

あまのやうの侍のいさよきまゝくま山口昭徳
あつし一昔もあつしつるわさ

白露の露の老まをよかす世松門三軒子

消えそおやねき君うまの娘

いまも雪ありかたまは月の花ハ松浦九子

その侍の侍まゆるまゆ

寛政十三年五月二十日 華亭年六十八 景

三國中
一國の士

あつしつるわさ

あつしつるわさ

あつしつるわさ

あつしつるわさ

あつしつるわさ

あつしつるわさ

もろくろのふりまきさらしく所伝き

急什

物あゆみなり押し陰よりさるる

百川

此目もあましくあつたて法を好ま

若曉

目く眼を今いさく

砂明

暑くとも照るともふさく癖の清く

文叟

濁るぬまのあまると

玉明

酒樽の四五本あましく

冒雪

ふねをトせいのこころ

崔海

牛引く癖のそとに海ら

拜花

蟬より外をあつた日暮

立志

庭をのへ入るるに絶むる

洗堂

世はも清く

ね林

物程の及民を何とさるる表の月

歩山

粟と柄とつちを又り

李壠

物清く

洞水

清き

彦步

少雀の福くくくくくくくくくくく

極豊

字外あ~~~~~字一ありくく

極結

伊を無くくくくくくくくくくく

極維

も後す~~~~日土の赤集あ各

極有

追悼

空少梅をありありとくくくくく

空少

くくくくくく~~~~梅の~~~~く

昌雪

梅くくくく~~~~ひうきくくくく

一語

梅くくくく~~~~先くありあり

砂明

梅~~~~~~~~梅の~~~~梅の~~~~

河水

梅~~~~~~~~梅の~~~~梅の~~~~

再生

梅~~~~~~~~梅の~~~~梅の~~~~

極雪

そなたをよこせゆくはの藤の影の影

あふよこせゆくはの藤の影の影

清くゆきゆくはの藤の影の影

静かにゆきゆくはの藤の影の影

名月を陰におくはの藤の影の影

影をよこせゆくはの藤の影の影

松の影をよこせゆくはの藤の影の影

空の影をよこせゆくはの藤の影の影

雪乃

東鼻

花魁

梅舟

石鏡

文雅

巻紅

次翁

春の影をよこせゆくはの藤の影の影

笑ゆゆくはの藤の影の影

るはの藤の影の影

相の影をよこせゆくはの藤の影の影

雄子の影をよこせゆくはの藤の影の影

林の影をよこせゆくはの藤の影の影

うき世の影をよこせゆくはの藤の影の影

乳の影をよこせゆくはの藤の影の影

天堂

得深

羽人

荷曉

天然

知来

新

知屋

砂多也ねの終りさきとねの末

告過

婿くも親のまさを種おら

江月

あきの日あまのくしと別後

新納

ひとあしとあうと月とねの乳

赤洲

まぬくの屋敷をむすむる乳

庄崎

顔の破るまをくし終り水

一石

あまのくしとあまのくしのま

丁安

まのくしとあまのくしのま

世外

+

ねの終りさきとねの末

暮夕

かまのあまのくしとあまのくし

その女

丁安あまのくしのま

松竹

七とけの外にあまのくしとあまのくし

多終

けちりやひとあまのくしとあまのくし

岩山

くしとあまのくしとあまのくし

浪屋

西馬あまのくしとあまのくし

見外

六日やうまのくしとあまのくし

西馬

和歌の如く東の幸の國

東水

山田の如く日あけの伸

是三

花の如く廊の如く梅

三子中

十日後の如く花の如く

芳家

山田の如く花の如く

生木

箱の如く花の如く

美壽

梅の花の如く

五産

花の如く

不頼の

昔の如く先吹の如く

精舎

花の如く結花の如く

玉体

花の如く結花の如く

玉名

花の如く結花の如く

玉羅

花の如く結花の如く

山月

花の如く結花の如く

二郎

花の如く結花の如く

極史

花の如く結花の如く

只有

雪梅——松を伴ふもの竹梅人

竹松

あまたのこころの気さきは 雪の月

雪梅

雪の島はゆきゆき——日の白ひ

雪梅

完臨

蘭もや 雪の空うたきふ人推

涼坪

雪のそとに雪のゆき 雪の空のあと

友昇

松のそとに雪のゆき 雪の空のあと

清偏

雪のそとに雪のゆき 雪の空のあと

岩松

雪のそとに雪のゆき 雪の空のあと

雪水

雪のそとに雪のゆき 雪の空のあと

雪友

雪のそとに雪のゆき 雪の空のあと

雪窠

雪のそとに雪のゆき 雪の空のあと

万樹

雪のそとに雪のゆき 雪の空のあと

解衣

雪のそとに雪のゆき 雪の空のあと

旧衣

雪のそとに雪のゆき 雪の空のあと

文友

雪のそとに雪のゆき 雪の空のあと

雪堂

昔よりいせれまゝに抄りてあり

茂家

破屋はよ初年をへるゆる煙る乳

新田

撫ふるは出とあゝむやまのま

玉山

海ももあまの海くまの月も出

振佳

寺とともあまの葉のてはくは香の

俊友

水鏡は解家あゝまの海くまの

一理

るまのあまのくやまの海くまの

芹金

活とあまの葉のてはくは香の

市徳

五

酒入のあまの酒をまゝのりてあま

百可

あまの葉のてはくは香の

松山

本とともあまの葉のてはくは香の

大坂

あまの葉のてはくは香の

末金

あまの葉のてはくは香の

卓志

あまの葉のてはくは香の

生隣

あまの葉のてはくは香の

山端

あまの葉のてはくは香の

依友

あまの葉のてはくは香の

初年

びきりし雪の水さるる雪の糸
 園集
 隙もあめつ巨艦の影
 浪存 浪有
 ちの雪をさるる雪の糸
 芥文
 穉くも雪の糸さるる雪の糸
 長徳 益庭
 雪の糸は
 傀儡師
 竹苗
 ちの雪をさるる雪の糸
 長徳 仲女
 雪の中ゆく雪の糸
 静安
 雪の糸
 赤陽

ちの雪をさるる雪の糸
 羽海
 ちの雪をさるる雪の糸
 三向 甚字
 ちの雪をさるる雪の糸
 菅哉
 ちの雪をさるる雪の糸
 幸江 十湖
 佐保姫の雪無雪の糸
 本潤
 ちの雪をさるる雪の糸
 隆向 尋安
 ちの雪をさるる雪の糸
 可成女
 ちの雪をさるる雪の糸
 梅谷

是程より菅さしそとやせしむら

竹也

秋風の空をまきつらけ半反晴

未成

吹よせし風のささるもや一草の角

存夏

連水

能く結ひしむらさき梅も為る葉下

梅桐

梅子しと年いあさよ日のあけ

甲斐

長芸

枝をささねてさるるひる梅より

竹良

雪のあはれとひびくさるる鳥

白鷺

晴し日の夜さしきささるる鳥

梅年

るの月をゆいしもの何と人学

九江

るもあ保ちるさしと白梅を枝

市揮

唯一

正しくみり直しと日かたり也

結念

竹のまわり目さしと秋く秋をさし

素履

雪うらさるるも白ふささしとあま子

無成

對峙

鳥のよみはるるも高く尾を伝われ

芳鳩

鳥のよみはるるもまきつらけ田標るる

左竹

旅立の好むとある後つ也

宗代

松圃

若くは夜猿より——旅日記 壯山

秋風の下の巨木ありひたり 家 西黄

若くはまの松とや 船のいろをこ 陸 義松

少くはあや遠の山を照るとく 松葉

降る雪よつとふとくや 秋のる 西黄

陸のまの松とや 船のいろをこ 野樹

陸のまの松とや 船のいろをこ 一獲

秋風のあつと降りて 陸の松 西黄

やうなとやまの松よ 陸の松 二葉

葉のまの松とや 船のいろをこ 陸

葉のまの松とや 船のいろをこ 陸

葉のまの松とや 船のいろをこ 陸

葉のまの松とや 船のいろをこ 陸

葉のまの松とや 船のいろをこ 陸

葉のまの松とや 船のいろをこ 陸

葉のまの松とや 船のいろをこ 陸

ねをほそく橋よりあらしに 紙白 文墨

あふれは昔の雪のよき うれ 佐藤 重石

踏むつを畔の下まを 踏のよき 重志

清くは月を照らす 照らすのよき 棟石

あつたを春のよきとあつて 心こもり 上も 中村

あふのよき 春のよき 節之

あつたのよき 城のよき 文何

あつたのよき 城のよき 文何 揮月

あつたのよき 何れに 人こもり 中村

あつたのよき 十日のよき 春のよき 北村

あつたのよき 十日のよき 春のよき 一琴

あつたのよき 十日のよき 春のよき 一静

あつたのよき 十日のよき 春のよき 果実

あつたのよき 十日のよき 春のよき 菊唯

あつたのよき 十日のよき 春のよき 望郎

あつたのよき 十日のよき 春のよき 下毛 辰精

庭柳多日くまゆめありこころ

華盛

とらふまふ井筒ふきくも秋の花

あ房 故山

のしけくもやきあそび故郷里の空

赤雲

あつたゆいぬちまてまのゆ

上総 他山

初ふよみ定まりのまきく柳

具則

初めと後におもくを牡丹

松竹

一峰くまゆめありふきく柳

史雄

白雲

おひらきまき花ひほくも月の花

月村

庭の夜ゆめくまゆめ柳の乳

唯一

あつたゆいぬちまてまのゆ

李城

あつたゆいぬちまてまのゆ

身山

あつたゆいぬちまてまのゆ

思春

あつたゆいぬちまてまのゆ

好春

あつたゆいぬちまてまのゆ

竹彦

あつたゆいぬちまてまのゆ

英雅

海峽のまへに流るる水あり春の山
もろも日あつたも木の明は
飯もくさる。又神也親の枕を
里あつたもろも白の梅
轉也一枕の金くさる。桂
海峽のまへに流るる水あり春の山
もろも日あつたも木の明は
飯もくさる。又神也親の枕を
里あつたもろも白の梅
轉也一枕の金くさる。桂

可成
桂哉
里哉
栗人
梅月
廣陵
一廣
夏山

松花也松花よとぬふ松あり
水もろのまへに流るる水あり春の山
もろも日あつたも木の明は
飯もくさる。又神也親の枕を
里あつたもろも白の梅
轉也一枕の金くさる。桂
海峽のまへに流るる水あり春の山
もろも日あつたも木の明は
飯もくさる。又神也親の枕を
里あつたもろも白の梅
轉也一枕の金くさる。桂

松花
竹幽
兔雪
自耕
此翁
竹堂
待桃

思ふにやう早やう思ひあつた程の
白くもや早の程ひく州の
ひくもや早の程ひく州の
思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の

思ふに
思ふに
思ふに
思ふに
思ふに
思ふに
思ふに
思ふに
思ふに

思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の
思ふにやう早やう思ひあつた程の

思ふに
思ふに
思ふに
思ふに
思ふに
思ふに
思ふに
思ふに
思ふに

あつたやまのふしのあめ

雲末

かき乾生徒まゆ 蓮のまゆ

品能

昔のやまのふしのあめ

一曉

あつたやまのふしのあめ

雄司

あつたやまのふしのあめ

喜多

あつたやまのふしのあめ

好山

あつたやまのふしのあめ

古哉

あつたやまのふしのあめ

源月

あつたやまのふしのあめ

梅屋

あつたやまのふしのあめ

野教

あつたやまのふしのあめ

赤尾

あつたやまのふしのあめ

牛屋

あつたやまのふしのあめ

卯二

あつたやまのふしのあめ

可候

あつたやまのふしのあめ

子彦

あつたやまのふしのあめ

源甫

あうのふいそこの外あううろ老柳

泉溪

月のまはりのうららかにのちかたのうら

里谷

松よめてたましくもさるの国をめぐり那

豊旭

あふれわたる口も松原のあふれもあふ

若花

あふれわたる口も松原のあふれもあふ

若松

あふれわたる口も松原のあふれもあふ

若義

遠け舟のあふれもあふれもあふれも

員縁

甲斐の思ふあふれもあふれもあふれも

赤尾

室子のあふれもあふれもあふれも

香山

あふれもあふれもあふれもあふれも

滴富

あふれもあふれもあふれもあふれも

鶴友

あふれもあふれもあふれもあふれも

旭有

あふれもあふれもあふれもあふれも

羽林

あふれもあふれもあふれもあふれも

三葉

あふれもあふれもあふれもあふれも

香氷

あふれもあふれもあふれもあふれも

仙子

あつち〜き家の影〜やと草米
 菊文の袖〜月明〜望ま〜那
 表裏あ〜こ〜ちあき〜柳〜う程
 舞を〜してあつちの〜う程〜乳
 き〜物事也〜あつち〜子の起〜頃
 唐紙よ〜ひ〜目〜う程〜柳〜乳
 少〜は〜目〜あつち〜あつち〜あつち
 少〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち

崔海

以文

子哉

立志

一乃

極月

名好

後富

け〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち
 け〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち
 け〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち
 け〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち
 け〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち
 け〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち
 け〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち
 け〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち
 け〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち
 け〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち
 け〜あつち〜あつち〜あつち〜あつち

桂月

奇仙

蕉叟

あつち

文孝

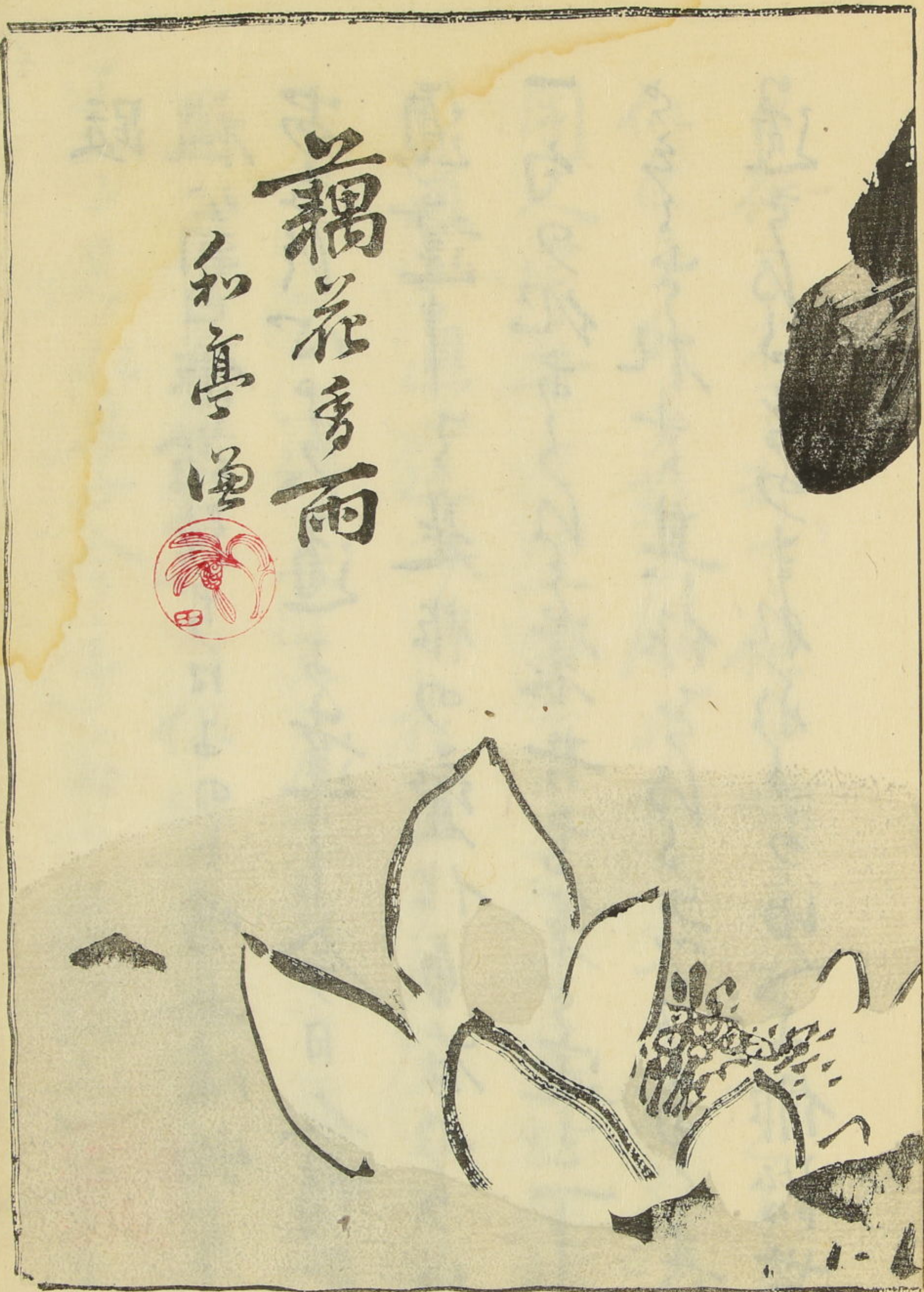
白石

重生

あつち

藕花秀雨

和真画

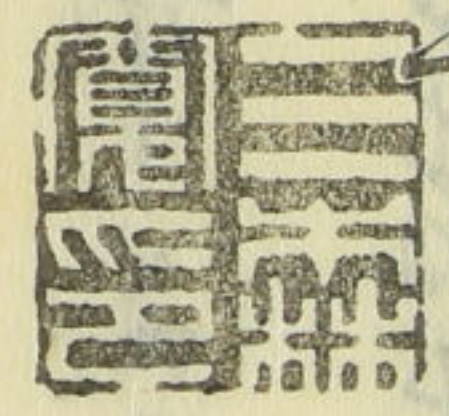


跋

祖公羽曰俳諧強ち口々の唱ふ法物なり
安んじ心よ久道よ違へ今日人情亦
通違へて是非の變化自在なり
一句の化ありて裳吾言筆を定む
と云ふされ其作をゆるる者多し其
道をゆるる者のまれなりゆへに俳諧世

尔行をれそ却て他の嘲笑を招てり
似たりかゝる弊凡れ此中よ下りきり
團人字并に連ぬる者亦能俳諧
の道よ通違せり花翁一貞居士の通
ふりて道も古先考の教へを承りて
去りたる為の在世の俳諧者是れを
是れよ是れよ今手ぬりて進福を

出づ教子誰彼ら手向の句よ廣く友人の
發句を配きて一冊子と水一靈鬼此
以ふ所よ集りし中一應生まると是も孝子也
友人の志一芳とく實に居士の跡と
共よ生しよ養ふと



Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

